

寺山修司

スポーツ版裏町人生



角川文庫

人生町裏版^{ばん うら まち じん せい}スポーツ

寺山修司^{てらやましゆうじ}



角川文庫 5469

昭和五十八年八月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一(大代表)

テ一〇二 振替東京③一九五二〇八

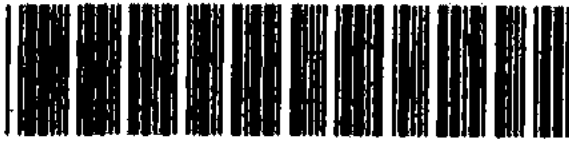
印刷所——暁印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-131520-0946(0)



日文701457905

スポーツ版裏町人生

寺山修司



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一章 スポーツ版裏町人生

友よいずこ

小指の辰

見えない馬に賭けろ

拾い屋仁義

群をはなれた狼

消された騎手

三本指の男

センターフライの犯罪

鉄仮面

星の流れに身を占って

忘却の土俵入り

七

八

七

六

五

四

五

六

九

七

五

四

夕陽よ、急ぐな

さよならヒットをもう一度

あなたの過去など知りたくないの

君泣くや母となりても

大男のたそがれ

牙

第二章 誰か夢なき

心は孤独な獵人のように

無情の夢の万馬券

片目の友への手紙

金で買えないものは何？

競馬の本、この一冊

孤児馬たちのブルース

次の映画こそ

一〇三

一二三

一三二

一三〇

一四〇

一四九

一五九

一六〇

一六五

一七〇

一七五

一八〇

一八五

一九二

第三章 勝者には何もやるな

一七

ウメノチカラ、今いずこ

一六

負け犬の栄光

二〇

生まれた時代が悪いのか

二四

ガラクタが光り輝くとき

二九

解説

西野ひろよし

二三

第一章

スポーツ版裏町人生

友よいずこ

豚箱に雨の降る夜は

酔っぱらって喧嘩^{けんか}して、豚箱へ放りこまれたとき、同房に一人の啞^{おし}がいた。

はじめのうち、皆は彼が黙秘しているのだとばかり思っていたが、何日か経つうちにほんとの啞だということがわかった。啞は、一緒に暮していた男を出刃包丁で刺したということであった。

無論、それが本当かどうかは、本人が語らないので確かめることができない。しかし、私が心をひかれたのは、この啞が刺した相手もまた啞だった、という話であった。身よりのない二人は、一つの下宿で、兄弟のように（というよりは夫婦のように）暮していたと言うのである。

「よくある痴情事件だよ」

と、取り調べの刑事は言った。

「もう一人の啞が女をつくったので、あいつがやきもちを妬^やいて、喧嘩になったのさ」
私は、少年時代に読んだ小説の一節を思い出した。

「その町には二人の啞がいた。

二人はいつも一緒だった。毎日、朝早く家を出ると、腕を組んで町の大通りを働きに出かけて行った」

という書出しではじまる、その小説の題は『心は孤独な獵人』という題であった。「心は孤独な獵人とは、いい題だな」と私は思ったものだった。

同房の啞は、その外見から皆に「へぶち牛」と呼ばれていた。へぶち牛は、気のやさしい、おとなしい男だった。将来、できればボクサーになりたい、ということを手真似で語り、すばやいシャドウボクシングの身ぶりをしてみせて、皆をおどろかしたりした。

同房のバーテンのへ左ぎっちょが「いくら腕っぶしがよくっても、豚箱にいたんじゃ無理だよなあ」と言っためいきて溜息をついた。

しかし、世の中には運つてもものもあるからね、と私は言った。

ヘビー級の世界チャンピオンだったヘンリー・ピアースが英国の刑務所から頼まれて、灰色の壁に囲まれた囚人たちの慰問のため、エキジビションをやることになったとき、スパリーリングの相手が囚人から公募されたが、だれもが「鼻の骨を折られる」のをいやがって引き受けようとはしなかった。

そのとき、肉屋の小僧あがりのジョン・ガリーという男がたった一人だけ志願して出て、チャンピオンを相手に堂々と渡りあい、そのことが評判になって、スポーツの有力団体のバック

アップを受けて、刑期繰りあげ釈放になったのである。勿論、^{もちろん}出所してプロボクサーになる、という条件付きであった。そして、一八〇五年、英国の刑務所を出た肉屋の小僧のジョン・ガリーは、世界チャンピオンになったのだった。

「そんな、うまい話でもあれば別だがね」と私は言った。

雨つづきの毎日だった。

巷^{ちまた}では、わびしい歌が流行^{はや}っていた。

星の流れに身を占って

どこを寝ぐらの今日の宿

すさむ心でいるのじゃないが

ぶち牛の陽の当る場所

二、三年たったある日。

いつものように、酒場「昨日」の止まり木でスポーツ新聞を読んでいた私は、一行の見出しに目を釘^{くぎ}づけにされた。

「啞^おのボクサー、ランキング入り」

新聞の片隅の写真は、小さいのでぼやけて見えたが、啞のボクサーが、まぎれもなくへぶち牛であることを物語っていた。へぶち牛は、フライ級十位の浜松を二回でKOして、ランキング入りしたのであった。

新聞によるとへぶち牛の名は赤城繁雄であり、野口ジムの所属である。

「あいつ、とうとうやったのだな」

と思うと、私は急にうれしくなった。

へぶち牛は、私たちにとってジョン・ガリー同様の希望の星になった。

やがて、啞の赤城は、バンタム級に移り、専門家の注目を集めるようになっていった。私が、はじめて彼の試合の放送をきいたのは、対矢尾板戦である。

バーテンをしていた私は、私の頭上にあるテレビの画面を見ることができず、アナウンサーの昂奮した声だけをきいていたが、試合は大接戦で、どっちが有利とも言えぬままに最終ラウンドのゴングとなった。勝ったな、と思ったが、小差の判定負けだった。

「啞のボクサーには、いろんなハンデがあるんだよ」

と新聞記者の岸田は画面を見ながら言った。

「相手がその気になればサミング（親指突き）や膝使い、エルボー（肘打ち）など何でもできる。」

啞はレフリーに、そのことを抗議しようとしても言葉が通じないからね。それと、いかにも

ゴングが鳴ったように、引きあげかける。啞はゴングがきこえないので、てっきり休憩だと思
いこんでノーガードになって下りかける。

そこへ目がけて、とどめの一撃！　って手もあるしね」

さまざまなハンはあるにしても、ボクサー赤城繁雄の活躍は目ざましかった。

彼にとって、グローブをはめた拳こぶしは、言葉の代りであり、リング上では、ものすごく能弁な
男に早変わりして、相手を「説得する」のだった。

私は彼の栄光を、同じ豚箱出身者として、誇りに思っていた。へぶち牛は、根性の男だよ。
と、一年おくれで出所したバーテンのへ左ぎっちょは言った。みんなでへぶち牛の後援会
を作ってやろうか。

ようやく詩が売れはじめた私と、酒場「昨日」のママのひもになって、足を洗ったバーテン
のへ左ぎっちょにとって、春はすぐそばまで来ているように思われた。

何しろ、へぶち牛に負けてはいられないのである。何か、でっかいことでもやらなきゃな
あ。

と、私たちは溜息をついてばかりいた。「新宿ブルース」の出はじめの頃ころである。

右を向いても　だめだから

左を向いて　見ただけよ

夜の新宿 なかれ花

矢尾板対赤城の一戦

ボクシング雑誌に紹介された、啞のボクサー赤城の小さなエピソードは、私の心に沁^しみるものだった。

ある夜、あまり早く寢床に入っただので、夜中にひとり眼がさめた。

眠ろうとしても、なかなか眠れない。

仕方がないから、起きてロードワークをしようと思った。夜中の二時過ぎだったが、走ってゆくと夜風が頬^{ほお}にあたって、気持がよかった。しばらく行くと、警官に不審訊問された。

「おまえは誰^{だれ}だ？」

と警官はきいてきた。

「こんな時間に、走ってどこへ行くのだ？」

赤城は、説明したかったが、ものを言うことができなかった。それに、一生懸命、口の動きと指話とで話したって、わかってもらうことはむずかしい。警官は、きびしく追及した。

「さあ、言ってみろ。おまえは、何者なんだ？」

赤城は、仕方なしに自分がボクサーであることを身ぶりで示そうと、ファイティング・ポーズをとり、シャドウの動きをして見せた。すると、警官は、じぶんが殴られるのだと思って、

「本官に抵抗するのかッ」

と手錠をとり出した。

悲しい、すれ違いのエピソードであった。

赤城の戦績は、ランキングの六位までで、ストップし、それからはなかなか上らなくなった。当時、フィリピンには啞のチャンピオン、ボニー・エスコバルがいて、大活躍しており、フランス・エロルデら強豪を、一蹴^{いつしゅう}してしまったというニュースが入っていた。

エスコバルは、日本のリングに登場し、やがて金子繁治と世紀のタイトルマッチをやることになるだろう。

へぶち牛^{へぶちう}にもチャンピオンになってもらいたいもんだね。

と、私とへ左ぎ^{へさぎ}っちょ^{っちょ}は話しあった。このままずるずるとランキングから消えてゆくのにやさびしすぎる。豚箱仲間に訪問されるのは迷惑かも知れないが、一つ、リングまで応援にいらう、ということにしたのである。

赤城と矢尾板の再戦の日、私たちは少しばかりめかしこみ、揃^{そろ}いの背広を着て芝公会堂まで出かけていった。だが、そこで、満場の拍手に迎えられてリングに上った啞のボクサー赤城繁雄を見たとき、私たちはガク然とした。

赤城はへぶち牛^{へぶちう}ではなかったのだ。

よく似ていたが、別人だった。

灰色のぼやけたテレビの画面の中ではよくわからなかったが、目の前で見ると、その違いは、はっきりとわかった。私たちは、自分たちが、勝手に自分たちの過去を美化するために、夢を見ていたのだ、ということをお願い知らされた。

だが、ここまで来たら私たちは赤城を応援するほかはなかった。

試合は、一方的に矢尾板のペースで進み、じり足の赤城に、矢尾板は素早いジャブからストレートをくり出した。啞のボクサーは、ゴングをきくことができない。セコンドの手の動きで、ラウンド終了を知るのだが、苦しくなった赤城は、たびたび、セコンドの手の動きを見ようと矢尾板から目を外らし、そのたび、痛打を浴びた。

パンチ・ドラッカー（打たれて、酔っぱらいのようにフラフラ）になった赤城、血まみれになった赤城を見ると、私たちはじぶんたちが夢見たことへ罰を下されたような、にがさを味わわれない訳にはいかなかった。

啞のボクサー赤城は、惨敗した。

十八勝十八敗五引分。

これが、彼の全成績だった。

引退して、いまは大井町の電気会社で働いているということである。

だが、啞のボクサー赤城繁雄が、私たちのへぶち牛でなかったとしたら、私たちのへぶち牛は、どこへ行ってしまったのだろうか。